



■ はじめに

盤錦（ばんきん；^{パンジン}panjin）市の「遼河」河口に広がる「RedBeach」（紅海灘）に日帰り旅行をしました。大連駅より北京行新幹線に乗って、2時間弱で盤錦市につきます。先の旅行で瀋陽行の新幹線は時速 300km ほどの速度でしたが、盤錦駅経由の列車は 250km/hr が最高速度でした。盤錦市は瀋陽市とくらべて地方の小都市ですが、それでも人口は 125 万人です。

■ RedBeach のマツナ(「松菜」；中国名「碱蓬」 jianpeng)

盤錦市の「遼河」河口に広がる湿地帯 RedBeach（紅海灘）を紅色に染める野草「マツナ」とは、海岸の砂地に生えるアカサ科の一年草。和名は葉が松葉のように細いことからついた（下図左）。花は秋に咲く。RedBeach では夏場には緑色だったマツナが、9～10 月にはこの土地の土壌に含まれる塩類・アルカリ成分により、まるで燃える炎の様に真っ赤に色づくという。マツナは中国・日本の各地に植生しているが、地質によって特定の季節にだけ、このような赤に変色するのは稀なことだと言われています。

インターネットの紹介を見ると、RedBeach には、下図中と右の図のように赤のカーペットが見渡す限り敷き詰められているような見事な光景が広がっており、観光客は遊歩道を歩きながら眺めることができるという。空の色彩と見事なコントラストの妙が楽しめる、夢心地の別天地ではないか！



図左 マツナ 図中と左 燃える「赤」あるいは「赤紫」のマツナの群生。遊歩道を散策して眺めることができる。

■ RedBeach へのあこがれと準備

昨年、留学生仲間の友人が RedBeach へのツアー旅行に誘ってくれたが、野暮用ができて行けませんでした。そこで、今年こそ何をおいても出かけようと、秋のこの時期をひたすら待ち続けていた。上の友人は、盤錦駅から現地への交通の便が悪いし、外国人には旅の常として予想もしないトラブルに巻き込まれる恐れがあるので、プライベートで行くなら、旅行計画は慎重にたてる必要がある、とアドバイスしてくれた。

私は学友の三輪さんと二人で行くことになったが、これに私の語学勉強（日本語と中国語を教えあう）仲間の薛（セツ；XUE）さんが同行してくれることになった。わが校の隣りにある「遼寧師範大英語科」の女学生の彼女は、インターネットで汽車の切符を購入したり、現地での案内で頼りになるガイド役をしてくれました。

■ 駅から RedBeach へ

盤錦駅で降りると、RedBeach の交通の便が気になります。一人 150 元(3,000 円)でバスツアーの呼びかけがありましたが、我々は当初の予定どおり、タクシーを拾うことにした。100 元のはずが、90 元だというタクシーに乗りました。が、白タクらしく、旅行のトラブルがここから始まりました。

RedBeach に着き、入場料売り場へ行きました。正規料金は 75 元 (1,500 円) で、70 歳以上の私は無料、68 歳の三輪さんは半額、薛さんも学割で半額でした。

ここまでは予定通りでしたが、肝心の広い公園内を移動するためのゴーカートも、貸自転車もなく、あたりは閑散としていました。公園内は広くて歩いて行ける場所ではないので困りました。五、六人の白人グループもどうやって公園内に行くべきか戸惑っているようです。

そこで、我々をここまで運んできた運転手がいいです。「公園内の移動から、帰りは駅まで送る。全行程 350 元だが、どうか？」

運転手はこうなることを知っていたが、タクシーに乗せようと企んでいたのでしょう。薛さんが値引き交渉をした結果、310 元となりました（つまり駅の往復と公園内の案内、90 元+310 元、合計 400 元）。ゴーカートがあれば百元程度安くなるはずだが、他に手だてがないので、これくらいは我慢せざるを得ません。日ごろは温厚でも、道理に合わないことが嫌いな三輪さんの頭にはそろそろ湯気が立ち込めているようだが、中国語を使って運転手と渡り合えないので我慢ガマン・・・



薛さんは、学生証によれば民族名が「満族」、つまり清王朝の「女真族」の末裔ということになる。母は漢族だが父の民族名を受け継いでいるという。前回、瀋陽旅行したときに案内してくれた王さんも「満族」だったが、「王」は典型的な漢民族の名である。中国では民族間の混血がすすんでいるし、薛さんは外見上では漢族と区別がつかない。ただし、彼女は 171cm の長身なので、やはり北方系の特徴が認められる。

■ ちょっと違う“アカ”色

紅海灘風景区内に入り、舗装された道路をしばらく進むとやがて、お目当ての赤色のマツナの群生地帯が見えてきました。しかし、<燃え立つような真っ赤>な色を思い描いていた我々は少々戸惑いました。



この目で見たマツナの群生



タクシーと公園内の舗装道路

三輪さんが「インターネットで見た色と全然ちがうな」と不満の声をあげたが、私も一見してそう思った。神社仏閣の観光写真の色が現実と少々ちがっても、どうということはない。が、ここ「RedBeach」の色合いが写真と現実の間で乖離しているのは看過できないのだ。

プロの写真家と較べて、私の撮影技術とデジカメは共に劣っていて、マツナの色は<赤黒く>見栄えがよくなかった。Photoshop 技術によって「講師師見てきたような嘘を言い」とはならない範囲内で、修正した画像を紹介することにしよう。

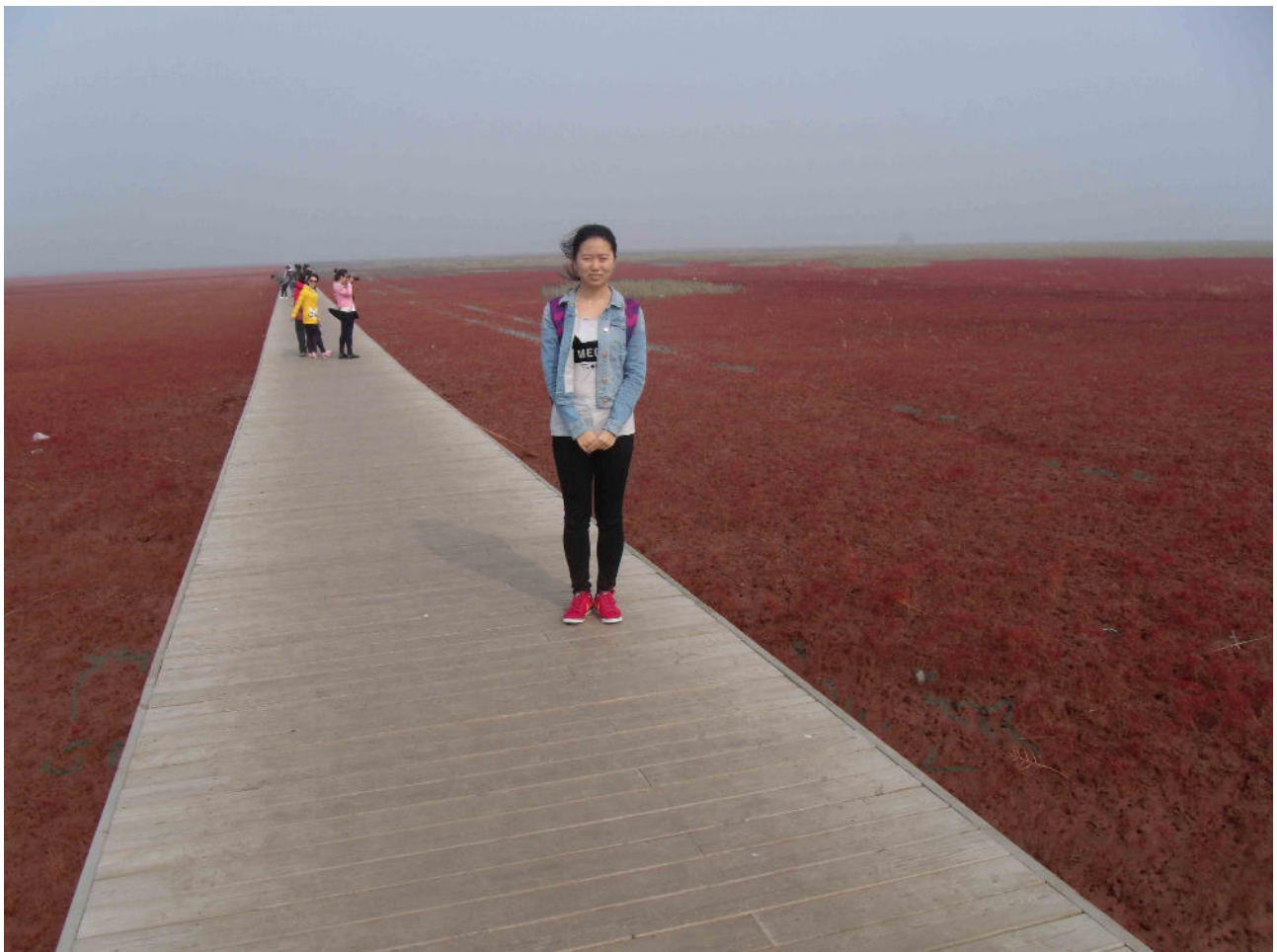


インターネット情報
燃えるようなマツナの赤



(上写真) 逆光で撮ったためか、画像は黒ずんでいた。Photoshop で画面を明るくすると、見事な赤紫のマツナの絨毯が浮かび上がってきた。フォーカスを絞ったので、廃船が近距離に見えるがそこまで1キロはあっただろう。対岸がうっすらと帯をつくっているの、あのあたりは河で河口はまだまだ先のだろう。

(下写真) 果てしなく続く木道の両脇にマツナの大群生地があった。こちらの方が赤みがかった。日本人は「紅色」とは英語でいう「ピンク」をイメージする。一方中国語では、日本の赤を「紅」と書くことが一般的で、「赤十字社」を「紅十字会」と呼ぶように。とすれば、「紅海灘」のマツナの色は「紅色」より「赤色」と理解すべきだ。





三輪さんと私は、昨年三月から交通大で中国語を学び始めてからの同期生。他の4,5人の同期生は、帰国したり他大学へ移ったりしてもういない。二人は、日露戦争の激戦地「旅順」・北朝鮮との国境の町「丹東」について、ここへ三度目の旅を一緒にした。



川岸のマツナ(左)と、強風に飛ばされて川岸のコンクリートに吹き溜まっているミズナの花(右)。間近かで見ると、ピンク色をしている。運転手がマツナの花を掌に掬って、私たちにを見せてくれた。食べると灰かに甘い味がした。日本では、ミズナの若芽や茎は食用にも使われているようだ。

北国の冬はもうまじかです。あと三、四週間後には、大連の宿舎に暖房用のスチームが通ることになっています。本日(10月17日)は、曇り空の上に、海から吹きつける強風でかなり肌寒い。これでは、さえぎる物のない広大な風景区をゴーカートで移動すると寒くて数時間も耐えられないでしょう。なるほど、ゴーカートサービスが停止されてるのもうなずけます。三輪さんは風に弱いのか、タクシーの中に逃げ込むことが多いが、私と薛さんは貪欲に、遊歩道の散策をつづけました。



遊歩道の先に向こう岸へと渡る小橋があった。写真を撮ろうとする先に釣り人が独りぼつんという。日がな一日いつ釣れるとも知らず釣り糸を垂れているのは、太公望にふさわしい。あたりにマツナの群生地はなく、鳥がたわむれている一見なんの変哲もない河の風情だが、静寂につつまれている雰囲気は漂っている。釣り人は居眠りしているのか？――竿の先が水面に沈んでいた。本日は曇り空、それがあたりをぼかし絵のようにさせている。「牧歌的な光景だ！」などと、月並みな表現をするのは遠慮しておこう。マツナの赤もなにもないところだが、RedBeach 最大の被写体は、ここではないか！――と思えてきた。そこで、パチリとシャッターを切る！ 下手な撮影技術ゆえ、ピンボケの写真になってしまったが、かえってそれがよかったかな？

ここかしこの河の泥の表面にたくさんの穴が開いている。小ガニの住処です（下左図）。盤錦市の名物食品と言えば、「盤錦米」で私も食べている。そして、もう一つ忘れられないのが「盤錦河蟹」で、今は産卵期で一番がおいしい時期です。RedBeach の河に棲む蟹は野生ですが、大連あたりの市場にも出荷されている蟹は盤錦地方の水田（or 生け簀）で養殖されてるものだそうです。中国名「チュウゴクモクスガニ」で、日本人には「上海蟹」としてよく知られている。一匹7-10元（150-200円）ですが、輸入品を日本で買うとその5-10倍もします。



チュウゴクモクスガニ
盤錦河蟹・上海蟹

丸の中は拡大

これをたらふく食えたら、いつ死んでもいい？

中国・遼寧省 大鍋で蒸された大量のカニ（「新華ニュース」より）

9月12日の夜、遼寧省盤錦市盤山県で、大きな鍋で上海蟹が蒸された。この催しはすでにギネス世界記録登録へ申請している。使用された大鍋は直径が6.6m、高さが2.3m、重さが7トンで、鍋一杯にカニが蒸された。クレーンが大鍋の蓋を持ち上げると、蒸しあがったカニのいいにおいが周辺に漂い、大勢の市民が集まった。

■ 休息所での異変

「游客服务中心」(休憩所)で一休みすることにしました。ここまで、我々が「紅海灘風景区」をタクシーで回遊してきたルートは右の標識図をご覧ください。

この休憩所には、貸自転車があり、近くの遊歩道をたどることができます。

遠くまで延々と続く遊歩道がありました。見えるのは背たけほどにも伸びたススキカアシの野原で、強風に煽られてうねっていました。

インターネット情報によれば、ここは、見事なマツナの大群生地で、果てしなく延びている遊歩道をゆっくり散策あるいは自転車で訪ねながら、マツナを身近に眺めることができる処であったはずですが。自然環境の激変か、手入れを怠ったためかは不明ですが、無残な姿に失望しました。

だから我々はちょっと歩いてだけで引き返し、まもなく盤錦驛に引き返すことにしました。



「紅海灘風景区」は更に南大門(おそらく河口近く)まで行けるが、また余分に80元を払わねばならない。それほどまでに行く必要がないと考えて、我々は休憩所から盤錦驛に帰ることにした。



こうして、RedBeachの探索はおわり、盤錦驛ちかくの蟹料理店で夕食を摂り、大連に帰りました。

大連はこれから冬支度に入るので、もう旅はできないでしょう。私は二年間の留学生活を終えて、来年の1月には日本へ帰るつもりをしております。だから今回の旅は、日本語教師と留学生、合わせて中国生活10年の最後を飾るものとなりました。(了)

余話(我が生まれ故郷にもRedBeachがあった！)

マツナはRedBeachだけでなく、中国や日本にもある海草です。

ただし、このマツナは、土壌に含まれる塩類・アルカリ成分という特殊事情のために、秋に真っ赤に色づくのです。だが、同様の条件のある土地が他にもないだろうか? —と、インターネットで検索したら、なんと、

我が生まれ故郷の北海道は、網走市の郊外「能取湖」にもありました。

ただし、植物名は「サング草」(正式名「アッケシ草」)という異なる種でした(下図参照)。スケールの点で盤錦市には劣るでしょうが、同じように湿地帯に繁茂しているようです。能取湖は、私が少年時代に何度も行ったところなのに、そんな不思議な草花があることは知りませんでした。戦前は北の守りの監視区域として日本軍の基地があり、戦後は米軍基地が置かれていて、立ち入りに制限があったのかも知れませんが、それよりも、おそらく半世紀以上も前の網走の人々は貧しくて、草が赤変するくらいのことには無関心だったと思われます。



サング草 北海道網走能取湖



サング草 能取湖の隣の湖(サロマ湖)

戦後いつの期間を経て、日本人の暮らしが豊かになるにつれて、ツーリズムの機運がたかまり、そんな中から奇草サング草の能取湖が観光地として見直されたのではないのでしょうか。同じことが、酷寒の2月にある網走市の「流氷祭り」にもいえます。私が少年時代には、流氷がオホーツク海岸に接岸するころは、もっとも寒い(「シバレル」と表現される)、漁師は魚にも出られないので、「流氷」など悪魔の悪だくみのように、忌み嫌っていたのです。それが今は、このクソ寒い時期に流氷見物のために、わざわざ本州から観光客がやってくるという、信じがたい現象が起こっているのです。

いずれにしても、網走能取湖のRedBeachは死ぬまでに一度訪問したいところです。

最後に、ついであら最近「網走刑務所」が歴史的記念建築物として、国の重要文化財に指定されたことをお伝えしておきます。